



給本支料等集存編

二

卷之五

第13
277
10



13
號 977
卷 10

木

大谷古猪之助

勇婦繪本更科草紙後編卷之五

遠州小夜中山麻 栗枝亭兜卯著

大谷古猪之助再び九重姫と集りて話

斯く古猪之助ハ戸棚より浮舟と出りて其ハ浮舟と手を合せ

復し其の陰より毒蛇の口はのぐれゆく此上何を播

下されしと其身のくらくくあふ明し鹿之助

之助とらふと家夫より不思議の縁ありてやと悦び

今宵よりと隔なく語りんと宜ハ浮舟ハ猶より有るに

此情し細古猪之助もあはれし語らんや寐む人とあはく

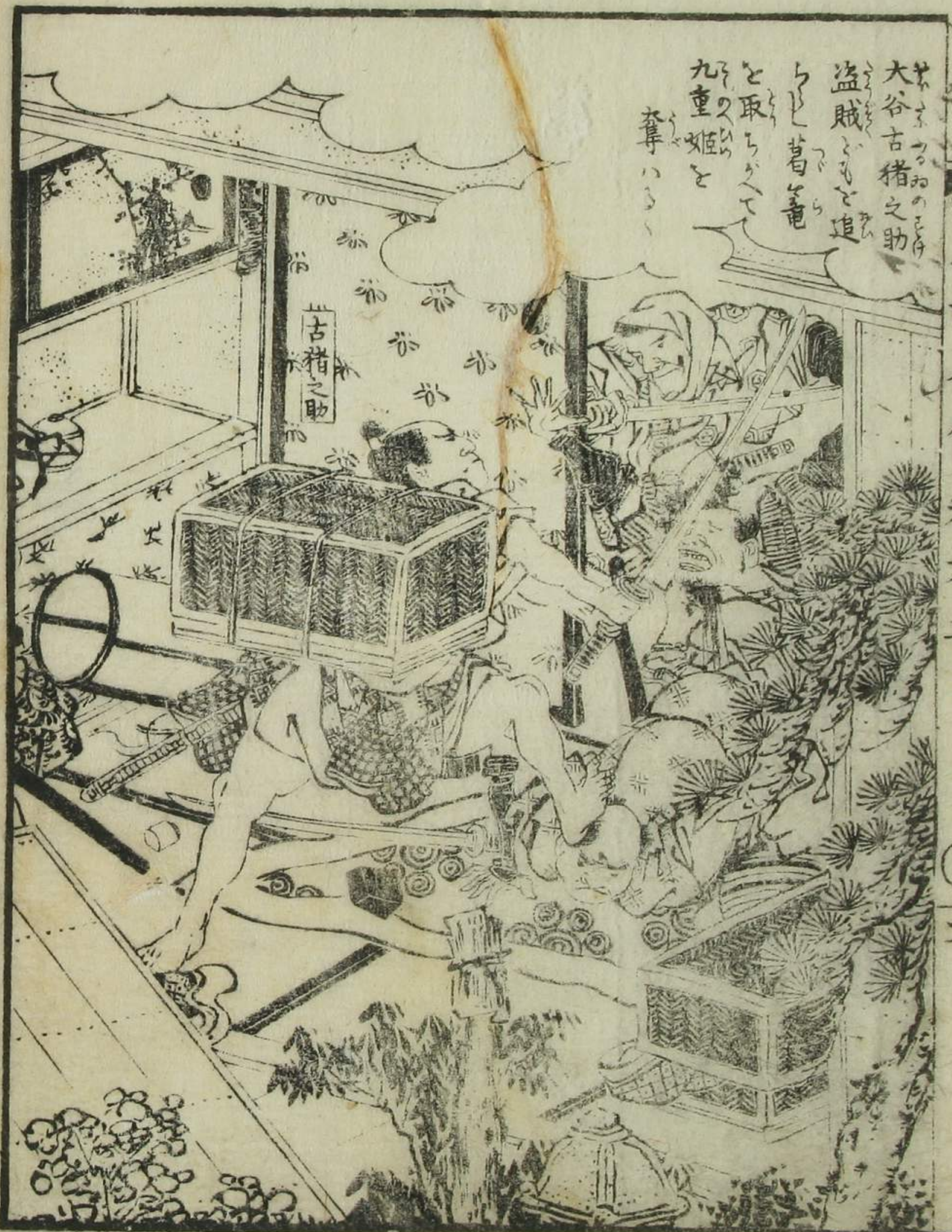
枕引よきく伏るる其夜も後夜の鐘もむきく草木も寐

枕引よきく伏るる其夜も後夜の鐘もむきく草木も寐

勇婦繪本更科草紙後編卷之五

入る頃勝手の方より物さぐり聞ゆれば浮舟ハ夫の
 のと思ひ寐入もやうびゆて多れが扱ハ又く宵の亭主勝手
 のうら尋るべ再び来りしうん此度ハ葛い竜へ志のびん
 先おのりしをえり物うれば吟味ももろと濁うらびに葛
 の中へ忍び入る姫柵古猪之助も旅の勞きうら前後も
 うらび伏せし勝手の方より盗人しと入れしう音の駑に
 扱ハ丹波の虎丸が追入るうんと姫君は葛い竜へ志ばせ身隠し
 古猪之助急度思ひて先上浮舟と忍びし
 時亭主の言々も裏の小門より浪手へ逃つうんと言
 定浪手へ逃る道あべり乗ハアうら見り参る人柵
 されしうも姫し心と付くと前裁の方へ出る柵し心得

と刀を抜うけ待りしに案のどく盗賊どもさうくと我
 の押込るは柵心得うらと入口待りけ夫場ハ一人切
 倒しうらバ盗賊ども大小ゆらにととさりりのを此内
 居るは油新とゆらとさびりうら古猪之助裏の小
 門を踏破り再び帰る柵し叫るうら我ハ此所うて
 んとゆらと裏門より浪手お待りけうらうらうらうら
 づいあうらとゆらと柵を何か姫君さうらと参る言捨
 うら浪手のかう急うら古猪之助ハ虎丸が追人のをうら
 何程のうらうらんと葛い竜と背ハさうらと負大太刀引ぬき
 うらうら幸なき立たれはうらうらうらうらうらうら
 葉の散るうらうらと逃失うら古猪之助ハ此程我ハ



大谷古猪之助
 盗賊どもと追
 らしむ昔の昔
 と取らうと
 九重姫と
 奪はるる

うそや柵の待ゆらんと裏の小門より濱手の方へと急ぎ
 ろく此盗賊実小虎丸が追人おらげば菜浪金藤太が手
 下ひらぐ此旅籠屋有福の聞えらるる強盗入来り
 お思ひの外柵古猪之助お中間七八人切倒れ逃るる
 去るるも残念なりと又取返し返り家内の者も此
 騒動おせらるる逃去り無人城のどくどく心静し財を
 と棄ひ取古葛菴の有るれともかアの中お能の
 らるるれなりと打らげさるる白小舟お取のり菜浪が大
 船へ急ぎるる古猪之助お大勢と切拂ひさるる柵心を痛
 らんと濱手のうそ来り見ま柵待りや古猪之助お
 あらうおとさるるや姫君のお供らるるうきしや海に沈り

おりんと葛菴下り蓋はらけけ姫君おらるる浮舟
 なるるれが兩人大お仰天して是はくはけうく浮舟も夢
 の心地しるる只さるるうきしや家前さるるうきしや
 旅の宿さるるや能寐入る我も夫のうきしや思いつけ寐
 入もやさるるうきしや勝手のうきしや駭しるるお宵の
 親方さるるお来りしるる宵おらるるたれし葛菴おれは
 此内おさるるお助らんと内より蓋とさるるお恐びのあり
 姫君の葛菴と取替あるるうきしやおらるるたれは尤の事なり
 と一部始終と語らるる兩人と狂気のうきしや追人のや
 ぐらお棄ひ返るるし違ひるしお口惜し次第に那
 遠くハ行り追えけんと阿修羅王の菜浪さるるかけゆく

向ふへ宵の旅籠屋の亭主振ひく来り扱く其身達ハ
 よくものづきあひし此盗賊を西海一の荒浪金藤太と
 て名高に盗人なり我家財も残らぬと奪ひ取只今船ハ
 乗持参りしりりきくおの船あつし船よりのくと後寛
 僧都のあつし足どりし多敷と古猪之助是と聞て扱ハ
 虎丸が追人めりハなつりしよな然る少ハ心安と亭
 主小尋りしと宵ふ我剛おらり古葛箒ハ賊の手入
 一々亭主打笑いされバ雜物と入り古葛箒も奪
 い立退り古猪之助仰天し其葛箒は取らぬと成へ
 歎何とも口取えんと身よりされバ其古葛箒ハ何の用
 かも立ざるとれ来ホガ家財もとて亭主の歎を耳

ふ入らば其柵借も其船とと声をはるに叫べと
 最早二三所も隔りぬまバ詮方なくてわらうか人の渚
 おつり捨船と見附是天のりなりと三人打乗
 艦を押ししと遠江の山奥加賀の国小育一人は浮
 舟と名を付し舟よりその小乗りもわらうれば
 舟と名を付しと廻り舟より更お沖へ出づり亭主
 打し其通りめり六千日押りし追付りしは
 我も此西須戸小年文しく住り船のりハ心得り我等
 が財宝も取返りしりりバ船を彼ホガ船お追付りし
 安くはしりし古猪之助力を得おの船お追付る財
 宝を取返りしりりハ船は頼むりし未だ



古猪之助

古猪之助
 姫君とらふ
 柵浮舟り
 小舟とり
 是と追ふ



三浦

浮舟

命つゞるゝ押し人々赤裸ニありし船を沖へ漕やりたる
お寔に能鍛錬し見えて矢と射し沖の方へ漕出たる

早川鮎之助横道兵庫之助九重姫と助つ活

此時盜賊も旅籠屋の家財と船を取棄て存りしゆ
るめり手下の七八人も切殺ししゆよまざる財宝ハ
念より奪ひ取りと真高くと金藤太元船小漕つけ
首領兼浪おまぐのり語り奪ひ取り品と小舟
より運びたる金藤太と人々と打見やり此古葛巻何
の為お持帰し手下も河とを渡りかやりの古葛巻
も却而しにまゐると入置物おのり覽らへ能小袖のいへ
姪と解と蓋と用けハ中より容宛る婦人の涙とるに

立出あハ手下は始め金藤太とわいいうめと忙まされど
姫君も毒の睨とのうれへ虎の口わ入し心地して只ゆ
しあへくと伏況しあつて道理なき金藤太眉をいそ
此婦人並しの人おあつて定る雲の上人あつて
かゝる田舎へ来り此古と葛巻の中お恐びうつて包まば
はあし悪くハ計らひとと盜賊お似合ご物や
らふ尋まハ姫君も免や言ん角や言んと子にお心派
らげれまひがふま中お隠しははらうまおんも無
躰のりもろくハ此海中へ身と投んとお心を定めまひて
何と隠さん自らハ中御門中納言宗教の娘九重といふ
ものなるが山中鹿之助といふ人お思はるるら祓の中へ派

受夫婦の益とて今鹿之助ハ播州尼子の所居より
一ニ子義父ハ自らガ姉君の所へまは所かんバ尋行人
思ひ一ニ丹波の国の盗賊大江の虎丸とて人者ハ奪り
既ふ彼ガ手より死人と思ひ一ニ鹿之助ガ小恩を受
者ハ助らば此所より来り一ニ夕の騷動ハ其人葛巻
を取違へ行つて一自らをゆるされく此所へ来り一
りり不便と思ひ一自は播州上月の城へ贈りかハせ
と人バ歎き一バ首領荒波金藤太大ハやうき扱ハ九
ふハ秋某日ハ播州芥川の辺りハ七助とナレ一氏ノ
ガ山中鹿之助ハ我を見出し一むいハむいハ豕世ハ出ハ
来急一とのむい判符の并黄金も一拾り別々一ハ近頃

播州尼子の方おれり一英名高きハいハ尋行て犬馬
の房と致さんと此所より来り一荒浪金藤太ハ酒
海賊ハ我と有徳の者トハ思ひ一酒ハ
一ニ此船中へおむき一殺さんと一其忽其賊
と海中一切ハ手下の者どもと一思ひ
一ニ手下の者ども大ハ恐ハ向後首領と一
一ハ一其つて一馬ハ鹿之助ハ対面と一
の功も一何面目ハ軍中乏ハ物ハ金銀ハ是
より一海賊と一金銀と一軍用金ハ夫と
土産ハ対面ハ名ハ荒浪金藤太と改ハ海賊の
首領と成ハ大江の虎丸某ハ元ハ金藤太とれと

たゞく文通き一以承る彼と欺き折節ハ文通せし之
 思ひ出せば日外大江山へ手下と候うハ下は途中より中御門
 の中間と文書を取之しうなをりも一か姫君のいふ
 けりしんら罪人を某より申さるるを多くと底頭をいふれば
 姫君を思ひの外のもりかふ若いつらふもあつらんともふ
 まへ金藤太早く其意と悟り未だ疑いの晴ざるも無理な
 らも其證據と出し一見入り候し客人も多く出まると
 うも船の奥より色白の若人出きりて最前よりいふ
 りきりしう残りけりし其ハ横道兵庫之助とて則山
 中鹿之助なる名を貰ひし者少くは此程播州へ立越鹿之
 助及ふ對面せんと此所へ來りし所手下の者ども其う賂用と

奪いし人といふ一と投ちしは首領金藤太その
 働と見きりし人なりしと尋らば止りし
 得と身の上はわづらひ某も鹿之助及ふ恩ある者なり
 かくくのりかき軍用金を集りんと仮の海賊と成るは
 巫一うけりしと志づく此所は軍用金千両満な西人
 夫と持て上月の城へ至りんと約し此船中ハ食客と成て
 罷在しと一部始終と語りしは姫君もゆふべ浮舟の物
 かきりの人なりしが始而案堵しあひしに悦びハ限られし
 ろく早く人とりて此と古猪之助柵もまたをりし
 宣うら矢と射る一艘の舟此元船と目かけ漕來りた

古猪之助柵九重姫下達浮舟兵庫之助下達活

手下の者ども沖と遙かならぬ只今此船は日づけり漕来るハ
正しく夕アの荒者あうけり油断なるといふとら早く早
此元船へ漕よせ古猪之助大音つけ汝命とく先小奪
い古葛筆と返せ左なくハ一と海へ切込と鮫の餌食は
呉きんと大太刀引ぬき元船へ飛うるまは姫君両手とらげ
むひやよ古猪之助早きうけり自らハ無きふらてつぞ
かういづく聊尔なせそと宣うけりめて心は安ト柵浮舟
も俱元船へ乗るけり悦び限り限るまは古猪之助重而
か悪黨の手小渡りぬいハ安鉢のていハ不審ハ金藤
大といふ首領ハ汝うまいうなと訣うまは姫君は助と其つけ
かきまといふうら浮舟目やく兵庫之物と見出しこと我夫

あうまは此所り何とてゆはし命をも愛はいつ成所
そと大仰天と尋まハ金藤太完ホと打うい無や不
審おはらん某元ハ海賊おあはばかやうくの幸まは鹿之
助及小大恩受尼子の陣中へたづね行んと思ひハ斯く
のりあは不斗海賊の首領と成と訣横道兵庫之助が
事まは落もなく語るれば古猪之助柵浮舟も再び驚
こ減おう不思美のうらとら此上を片時とんや
上月の城へ供中の替礼と急ぐんとすはとびたる旅籠屋
の亭主恐らく這出かき目出度ハ茶會ふハ我ホ家
財何ぞ返下されと願ひたハ金藤太打うい寂
くや盗賊も是限りたれば汝が家財何うき人早くとら

中べーと言ふれば、あゝ辱らしと、もろくも勇ま船と押立、我
 家へ、とハ歸り、かゝる所、小渡六の、早船
 付注進、一々、只今、大江山の、虎丸、我住家、を焼く、無提
 京都へ、出い、小將軍家の、吟味、嚴、一々、所持の、金子、を、残
 らば、手下、おとせ、是、ま、番、て、い、わ、る、き、浪、人、と、い
 らく、一ツ、お、かり、度、皆、手下、の、者、五、六、人、小、財、宝、と、い、て、追
 付、此、所、へ、参、り、ま、い、し、注、進、一、々、古、猪、之、助、大、お、悦、び
 一、々、つ、が、為、お、泰、母、生、害、せ、り、ま、い、し、此、所、へ、来、ら、ば、我、一
 玉、の、首、引、拔、り、母、の、供、養、お、せ、へ、と、勇、立、ば、金、藤、太、押
 留、か、ら、び、せ、く、所、お、り、び、我、軍、用、金、千、兩、お、ら、ん、と、心、掛
 っ、る、虎、丸、が、黄、金、と、持、来、る、事、天、我、一、功、と、い、ふ、も、あ、り、ま、い、し、

一、々、と、教、ま、い、し、と、安、し、と、い、ふ、も、我、飽、ま、い、し、た、ば
 一、々、黄、金、と、い、ふ、其、上、足、下、と、呼、出、一、本、望、と、遂、に、次
 一、々、姫、君、も、我、細、お、ま、い、し、つ、い、柵、者、も、仮、お、ま、い、し、つ、い
 一、々、只、何、も、の、も、あ、る、古、猪、之、助、も、我、呼、出、と、い、ふ、も、あ、り、ま、い、し、つ、い
 一、々、出、あ、ら、る、是、連、も、鹿、之、助、名、の、由、為、り、と、い、ふ、も、あ、り、ま、い、し、つ、い
 一、々、虎、丸、連、一、と、侍、ま、い、し、つ、い、か、く、と、い、ふ、も、あ、り、ま、い、し、つ、い、大、江、の、虎、丸、ハ、手
 一、々、下、の、と、い、ふ、金、指、持、せ、船、お、の、り、悠、々、と、漕、付、元、船、へ、無、提
 一、々、ま、い、し、つ、い、金、藤、太、出、向、い、寔、に、国、隔、り、ま、い、し、つ、い、今、ま、い、し、つ、い、對、面、も
 一、々、い、ま、い、し、つ、い、不、思、義、お、ら、る、も、来、臨、あ、ら、ま、い、し、つ、い、本、望、の、い、ま、い、し、つ、い
 一、々、と、懇、懇、と、述、ま、い、し、つ、い、虎、丸、も、誠、に、足、下、の、高、名、折、り、得、て
 一、々、對、面、つ、ま、い、し、つ、い、存、せ、り、と、い、ふ、も、あ、り、ま、い、し、つ、い、此、度、不、斗、古、猪、之、助、一、奴

藤太引取く心と安んじり我が手入り西へうらば
 骨をいしいづも心お随つて人者ども船底へうち込
 らうりつせよと引立きバ虎丸よろこび絶えび誠のま下
 の厚志報どう物るしまらぐ持参の金子と預け置
 猶も諸家の官物と奪ひ取謀と談どりんと金言以
 取らせ大江山の隠家と焼きし時金を大なりや取
 除り五百金預けりなりと鮎之助お渡せば官押開
 こころりつせよと預けり人是より兩人心と合とは
 寔お竜お翹あふか如くなりいざ心より一盃と傾けめと
 まくく酒を勧めたる此時手下の者どもと大お酩酊
 前後もあつて伏する虎丸も大お酔り船をこし思

寔お大江山の山中おりんよりかく四方を見晴
 暮さん生涯の本望なると余念なく見えれば鮎之
 助も時おハトと船の中へ入る虎丸志づくりつて傍に
 見廻ると人あつたバ亭主も酩酊し寝る水
 一ツ呉しつてお呼ぶて畏れんとて立出るものハ古猪
 之助なり虎丸ハ仰天しつて汝ハ古猪之助をいふ先お
 手下お討まうと聞つては生るつて
 言せも立ど愚や虎丸汝が預けし姫君ハ我主くと
 たのむ鹿之助をの奥方なり夫ゆゑお母も自害し
 そりそれとも汝が無体の悲慕より起るも罪ハ
 汝おり是れお積悪今日おせりつてバ覚悟せし信



古猪之助

大江虎丸



早川助之助

横道五郎之助

古猪之助大江の
虎丸と討て母の
仇と報入

かくもハ虎九怒つゝ黄口の冠者法外の一言葉主人金
 藤太ハふしゝかゝる者ハ生置ゝヤ早く打殺しおへ息
 巻く速くもバ占猪之助朝々い金藤太とらふと何者と
 非人是も鹿之助の恩人うう汝と死の悪人おゆるは汝か
 持泰の黄金は取らん為かくくくひーなり最早汝と此
 世お用多た骸るハ早く焰ナの手下となりて迷途へ趣
 く登しと大太刀引抜切くかきバ虎九ハらき果てり
 ろろが扱ハ金藤太とりも赤黨の者おゆるはくや手下
 の者ども油断とろろろり起よくと罵り太刀接合せ
 ぶぐぐく戦いーが吉猪之助が強カふいを敵とべき両段
 とかり海へ切こまれくる此物音お手下の者ども

浅間しとま上と兵庫之助傍らりやう一海へ切尽し
 々々ハ鮎之助兩人と仰き立出来られり人ぐいざや
 望の軍用金も千兩お余アられは是と七産ハ尼子の城へ
 立越んと姫君柵浮船諸とも悦み限り
 山中鹿之助九重姫共外人ハ逢ふ結
 此下無活尼子の家臣山中鹿之助幸盛と天下ハ英名と
 かり此人一人およりて近国より手くくく叶くハ暫く
 上月の城静謐ありたれば義久の奥方妹姫と迎し
 京都へつうりおハ中納言及大小警以あハ先達而迎
 一法谷藤内とり者来り姫柵諸とも差つうり
 其後何の便りもく不審お思ひーがいをれり人初

而駭あはざりては蘆中あしなかつの心こころ歎なげ大おほくく上うへと下したへとおへいく
夫おとこより西国さいこく海道かいどうと手て分けわけて尋たづねねても豈あらうとんや丹
波な国くにへ連つ行ゆくは播は磨まのまもも此この頃ころと聞きくは扱あつつ將軍しやうじん
家け淫いん酒しゆののあまりあいいりりたた女にと無む躰たいのの奪うはらいい取とりよは
風かぜ聞きくは扱あつつ將軍しやうじん家けへ奪うはらいい取とりよは
カかととゆゆくはいいくく此この時とき西国さいこくより海賊かいぞくのの官物くわんぶつ返
奪うはらいい取とりよはは聞きくは扱あつつ將軍しやうじん家けへ奪うはらいい取とりよは
と制せいするは大名だいめいももいいくく比ひ其その終しゆうのの海賊かいぞくと制せいするは人ひとももいいくく禁裏きんりへ
いいくく西国さいこく廣ひろくくとといいくく後ごのの海賊かいぞくと制せいするは人ひとももいいくく禁裏きんりへ
扱あつつ財宝さいほうと奪うはらいい取とりよははいいくく武ぶのの恥ちのの所ところ某
一人ひとり能よ向むかひひくくは海賊かいぞくとといいくく取海とくかいの道みちと聞きく

と通路とんろ快たくくと一いつつつの謀はかりとといいくく舟ふねと高たかくく舟ふねの女
くくとと只ただ一人ひとり其その中なかへ乗のりりりたた明石あかしの沖おきかか居ゐる
賊ぞく船ふねと目めづづけけ漕そう行ゆくは此この時とき早川はやがわ鮎あゆ之助のすけ古猪こじゆ之助のすけ兵庫
之助のすけの姫ひめ君きみのの口くちにに播は磨まのの上うへよりより押お行ゆくはは
くく鹿しか之助のすけが小舟こぶねと行ゆ合あひひりり鹿しか之助のすけかかくくとといいくくとといいくく
船頭せんとう目め早くはや見みるはいいくく叫こゑ々々とと只ただ今いま行ゆくはいいくく船ふねは
名な高たかきき菜浪ななみ金藤きんとう太たくく海賊かいぞくの首領しゆりやうの船ふねあありりとといいくく
よりよりとといいくく夫おとこ漕そうとといいくくとといいくく船ふねは追お付つ大音おほねゆゆけけ凡まづ天あま下くだ
お住お人ひとが禁裏きんりへ納いれれるは官物くわんぶつと奪うはらいい取とりよはは無む道みちの海賊かいぞく天罰てんばつの
るるいいくく召捕めいほめめ向むかひひりり覚悟かくごせせとと元船もとふねへへとと飛上とびありりは
船中せんちゆう大おほ駭あははざざ立たてて討手うつけを向むかひひりり我われ元もと海賊かいぞくのの行ゆくは

きびしく此業と云ふは所詮逃ぐ所なり某一人快く縄を
つくりしん兵庫之助古猪之助ハ姫君と鹿之助をへ手渡
るる一と鮎之助覚悟と極め必聊尔云ふよな海賊ハ首領
浪金藤太夫へ恭つらつら受たり同船の者どもハ盜賊
みわびに播平路を送り送る者どもハ此人とゆふら静
し立出さる白目見事ハ山中鹿之助とハ鹿之助及らう
我を君より名と貰い一早川鮎之助とせいとつふを鹿
之助も教習の目と定り是と見事ハ先年小川あま鮎と取
男をればこハいふたかゝる西黨を落入らうとゆふれい
其ころりわらび水月より人々各是へ出さるといふ
重姫柵兵庫之助浮船古猪之助も立出是ハくといはる
果て

計く鹿之助不審晴頃日京都のうらハ聞小姫と奪ひ取りし
中納言及のゆけきのは思ひもつら柵諸も此所より遠州を別
まゝ大谷古猪之助兵庫之助夫婦鮎之助一揃ふらう誠お不思議
いふも思ひあり包まびらうとてふは姫を泣くあぐの危難ハ達古猪
之助お助けし老母の義死まゝ落もく語りまハ皆く已く身の上
とも語り軍用金と貯へんとかうハ海賊とあり虎丸と討取り
委しく語りたれば鹿之助横手と打人々の義心と感し船を海へ漕付上月
の城へ帰るれが義久奥方の悦大なるゆは姫君も久あう妙上の
對面やう悦び涙ふたれが義久三入の義士を召出り大柵
殊お鮎之助海賊とまで成る軍用金集り大功是皆鹿之助が徳の
陽報しうと吉日を撰び姫君鹿之助婚姻の義式をばまハ鹿之助も辞



三日月

早川結之助

横道兵庫之助



山中鹿之助

大谷古猪之助

九重姫

とる以詞ことばく姫君と千代八千代と契ちかりて兵庫之助ハ浮船うきふねと難波なにわ
より受出うけだし鹿之助しかのすけ謀まりて夫婦夫婦とる三人の者ものも尼子にじ不ふ随ずふべ
と何なにりてこれハ古猪こじ之助のすけハつひも鹿之助しかのすけが家来けらい不ふなり下くだりて頭
ふも我われ久くも其志そのこころと感かんじ鹿之助しかのすけ不ふたまり横道よこみち兵庫之助ひょうごのすけ早川はやがわ鮎あゆ
之助のすけ旗はた下くだりて尼子にじの十男じゅうなんのうらみ是こゝより京都きょうとへ右みぎ之の也なり
これと通とほじりて宗教しゆきやう卿きやうの正悦せいえつび菊酒屋きくしゆゐへも柵しやくよりみよを添そへつ
くまに菊きくが悦えつ大おほくはるは上月うづみづきの城中じやうちゆうハ金銀きんぎん以もて山やまをのりてのりて
生なまじり心地こころぢも果はえたること目出度めでたき

繪本更科單紙後編卷之五大尾

和漢 西洋 書籍 賣捌 處

大阪心齋橋博愛町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

